

学 術 論 文

# 保育の表現技術（ピアノ演奏）の指導法検討

## —意識の特徴からの考察—

夏目 佳子

### A Study on Teaching Methods for Expressing Technology for Piano Performance in Early Childhood Education

#### — Consideration by the Feature of Consciousness —

NATSUME Yoshiko

#### 1. はじめに

筆者は、2017年度、本学の1学年の前期に開講される音楽の授業でのピアノ演奏の指導法について研究を行った。その際、筆者がピアノ演奏の指導をする際に重要としている12項目の内容に対して質問紙調査を行い、以下の5点が明らかになった（夏目2018）。

- (1) 音楽の授業の開講時と終了時の12項目に対する意識は、ほとんどの項目で、初級者1グループ<初級者2グループ<中級者グループ<上級者グループであった。
- (2) 音楽の授業の終了時のグループ平均評価点から開講時のグループ平均評価点をひいた評価点増加は、すべて正の値であった。
- (3) ピアノ学習経験が短いと評価点増加が多く、経験が長いと評価点増加が少ない。
- (4) ピアノ学習の初期の段階で意識できるようになる項目とピアノ学習初期に意識し始めるが意識の定着に少し時間のかかる項目の2種類の項目がある。
- (5) 項目「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」と項目「12. 正しいテンポで演奏する。」が、上級者グループの評価点増加の多い項目であった。

そこで、2018年度の1学年の前期に開講される音楽の授業においても同様な質問紙調査を実施し、2017年度との相違を明らかにすることで、2018年度の学生のピアノ演奏に関する意識の特徴と、そこからわかるピアノの指導法を明らかにしたい。そして、学生たちの、ピアノ演奏レベルの向上と効率の良いピアノ学習に結び付けていきたい。

#### 2. ピアノ演奏の授業の流れ

音楽のピアノ演奏の授業の流れは、前報（夏目2018）記載と同様である。具体的には、1回の授業を前半後半に分け、毎回の授業で行われるピアノ演奏の指導の時間と、音楽理論もしく

は歌唱の指導の時間にあてるという学習方法をとっている。音楽理論と歌唱の授業回数は決められている。本研究では、3つの授業内容のうちピアノ演奏の授業に関して検討する。

授業は、学生のこれまでのピアノ学習歴を考慮し、初級者、中級者、上級者の3つのグループに分け、グループレベルにしたがって個人レッスンで指導する。ピアノ演奏の1回の授業の中で、実技指導のレッスンを2度行い、実技指導のレッスン以外のピアノの時間は、各自個人でピアノの練習を行う流れである。

課題曲は、バイエルの練習曲と弾き歌いのピアノ伴奏曲の2つを基本として用いる。

### 3. 質問紙調査による検討の結果

#### 3. 1 質問紙調査の目的

音楽の授業の中で、筆者は、ピアノ演奏の指導における多くある指導項目のうち、特に12の項目に重点をおき、学生がピアノ演奏の学習を効率良くできるよう指導をしている。

そこで、2017年度と同様に、2018年度の学生に、ピアノ演奏の際の12項目に対する意識について質問紙調査を行った。質問紙調査は、ピアノ指導の授業の最終日に行った。12の項目に対するピアノ演奏時の意識に関して、授業の開講時と終了時での違いを明らかにする。

#### 3. 2 被験者

質問紙調査の対象は、2018年度入学の1年生の中で、音楽の授業で筆者がピアノ指導を行った学生23名とした。

音楽の初回の授業で、学生を初級者、中級者、上級者の3つのグループに分けた。その際、これまでのピアノなどの鍵盤楽器の学習歴や学習してきた内容、本人の希望等を考慮した。初級者は、ピアノ学習経験がないもしくは短い学生のグループで、12名であった。中級者は、ある程度の期間鍵盤楽器の指導を受けたことのあるもしくは現在も指導を受けている学生で構成するピアノ学習経験がある学生のグループで、8名であった。上級者は、鍵盤楽器の指導を10年以上受けたことのあるもしくは上級の曲が演奏できる学生で構成するグループで、3名であった。

また、2017年度、質問紙調査の結果を検討する中で、初級者グループは、ピアノ学習経験の有無によって特徴が異なることがわかった。そのため、初級者グループを本学入学前にピアノ学習経験のない初級者1グループとピアノを習ったことがある初級者の学生と本学入学前から習い始めた初級者の学生で構成されたピアノ学習経験のある初級者2グループに分けた。2018年度も同様に整理する。また、上級者に関しては、2017年度は鍵盤楽器の指導を10年以上受けたことのあるグループであったが、2018年度は鍵盤楽器の指導を10年以上受けたことのあるもしくは上級の曲が演奏できるグループとした。

### 3. 3 調査方法

質問紙調査の内容は 2017 年度と同様とし、2018 年度と 2017 年度の比較を行う。質問紙調査の内容は、表 1 の 12 項目である。

表 1 質問紙調査の項目

1.	正しい音で演奏する。
2.	正しいリズムで演奏する。
3.	正しい指使いで演奏する。
4.	正しい鍵盤の位置で演奏する。
5.	曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。
6.	曲の途中の休符を正しく演奏する。
7.	正しい強弱記号で演奏する。
8.	調号を確認し、正しく演奏する。
9.	左右の音のバランスを気をつけて演奏する。
10.	ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。
11.	臨時記号を正しく演奏する。
12.	正しいテンポで演奏する。

音楽の授業の開講時と終了時において、ピアノ演奏時に 12 の項目にどの程度注意を払って意識しているか、1 から 5 の 5 段階評価の中から該当する箇所 1 箇所に○を書いて回答してもらった。5 段階評価の評価点は、表 2 の定義とした。それぞれの質問項目につき、各グループの平均値を求めて検討する。

授業では、バイエルの練習曲と弾き歌いのピアノ伴奏曲の 2 つのピアノ演奏の指導を行うが、本研究では、ピアノ演奏を対象とするため、バイエルの練習曲のピアノ演奏のみを調査した。

調査は、2018 年 7 月と 8 月に行った。

表 2 5 段階評価の評価点

評価点	内容
5点	良くできている
4点	少しできている
3点	どちらともいえない
2点	あまりできていない
1点	全くできていない

### 3. 4 結果

#### 3. 4. 1 初級者1グループの結果

図1は、初級者1グループの回答結果である。

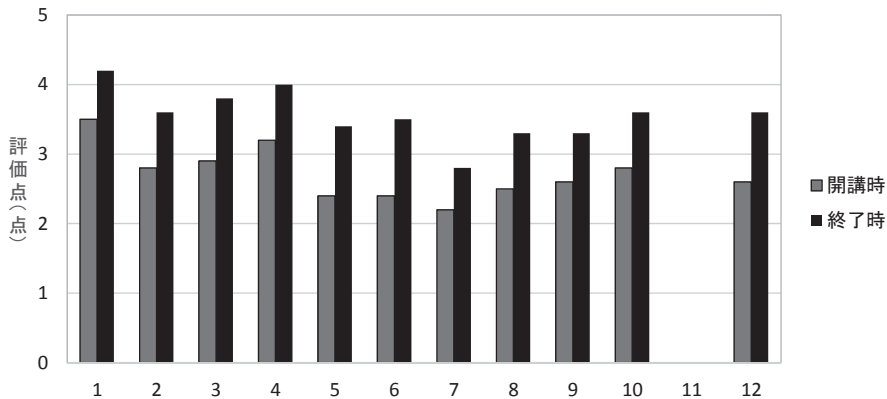


図1 初級者1グループの評価点

初級者1グループは、本学入学前にピアノ学習経験のない学生のグループで、人数は10名である。図の縦軸がグループ平均の評価点で、横軸に質問の12項目が置いてある。図中の灰色のグラフが音楽の授業の開講時の評価結果で、黒色のグラフが音楽の授業の終了時の評価結果である。これらの図の構造は、3. 4のすべての図に共通である。項目「11. 臨時記号を正しく演奏する。」は、臨時記号が演奏曲にまだ含まれていない曲を演奏している学生が10名中8名いたため、初級者1グループの検討項目から除いた。

図1の結果から11項目すべてにおいて、音楽の授業の開講時より終了時の方が、評価点は高くなっていった。評価点の増加は、0.6点から1.1点の間であった。音楽の授業の開講時と終了時を比べると、項目「6. 曲の途中の休符を正しく演奏する。」が1.1点増加し、もっとも増加が多かった。つぎに増加が多かったのは、項目「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」と項目「12. 正しいテンポで演奏する。」で、1点増加した。0.8点評価点が増加した項目が4項目と、一番多かった。項目「2. 正しいリズムで演奏する。」、項目「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」、項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」、項目「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」の4つである。11の項目に対する意識は、音楽の授業の開講時から少しずつ高まり、授業の終了時に黒色のグラフの値まで高まったと考えられる。

#### 3. 4. 2 初級者2グループの結果

図2は、初級者2グループの回答結果である。

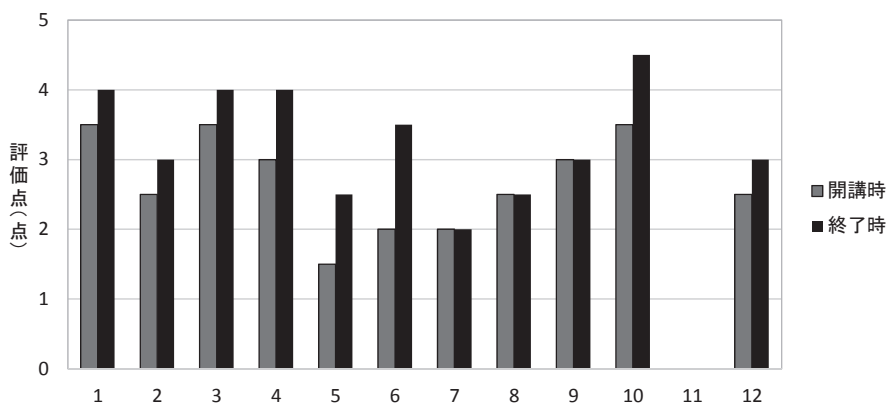


図2 初級者2グループの評価点

初級者2グループは、ピアノを習ったことがある初級者の学生と本学入学前から習い始めた初級者の学生で構成されたピアノ学習経験のある初級者のグループで、人数は2名である。項目「11. 臨時記号を正しく演奏する。」に関しては、回答時点で2名の演奏曲にまだ臨時記号が含まれていないため、検討項目から除いた。

項目「7. 正しい強弱記号で演奏する。」、項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」と項目「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」の3項目は、音楽の授業の開講時と終了時で評価点は変化していないが、それ以外の8項目に関しては、授業の開講時より終了時の方で評価点が高くなっている。項目「6. 曲の途中の休符を正しく演奏する。」は1.5点と評価点をもっとも多く増加した。つぎに多い1.0点増加した項目は、項目「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」、項目「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」と項目「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」の3項目であった。

### 3. 4. 3 中級者グループの結果

図3は、中級者グループの回答結果である。

中級者は、ある程度の期間鍵盤楽器の指導を受けたことのあるもしくは現在も指導を受けている学生で構成されたピアノ学習経験がある学生のグループで、人数は8名であった。すべての項目で、音楽の授業の開講時より終了時において評価点が増加している。項目「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」はもっとも増加が少なく0.2点であったが、それ以外は、0.5点から1.1点増加している。一番多く増加した項目は、「12. 正しいテンポで演奏する。」である。項目「7. 正しい強弱記号で演奏する。」と項目「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」は1.1点評価点が高くなった。0.9点評価点が高くなった項目が一番多く、3項目であった。項目「3. 正しい指使いで演奏する。」と項目「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」、項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」である。授業でのピアノ指導状

況から、どの項目も音楽の授業の開講時から終了時にかけて、少しずつ意識が高まり、評価点が増加していると思われる。

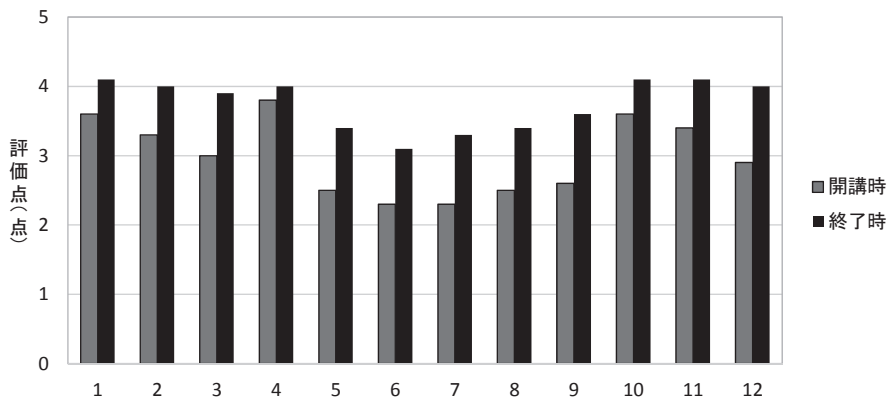


図3 中級者グループの評価点

#### 3. 4. 4 上級者グループの結果

図4は、上級者グループの回答結果である。

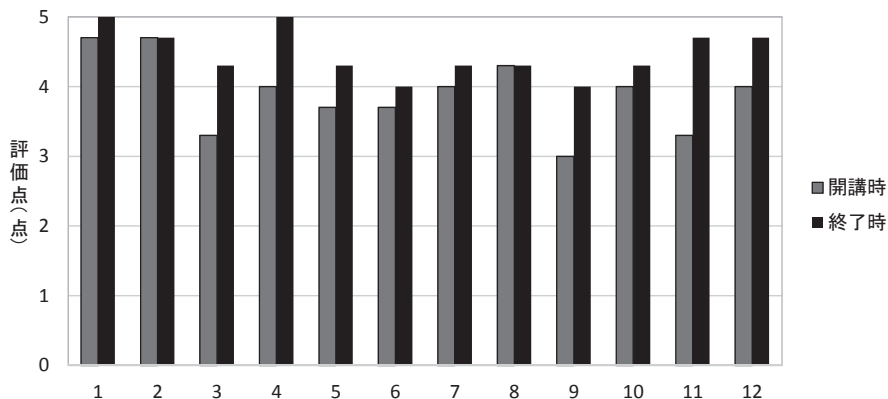


図4 上級者グループの評価点

上級者は、鍵盤楽器の指導を10年以上受けたことのあるもしくは上級の曲が演奏できる学生で構成するグループで、人数は3名である。上級者は、12項目中10項目で評価点が増加した。増加した点数は、項目によりばらつきがあることがわかった。もっとも多く評価点が増加した項目は、項目「11. 臨時記号を正しく演奏する。」で1.4点増加した。演奏曲が難しくなると臨時記号も多くなる場合があり、それらをしっかり意識しながら演奏できていると考えられる。次に評価点が増加した項目は、項目「3. 正しい指使いで演奏する。」と項目「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」、項目「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」の3つで、1点

増加した。項目「2. 正しいリズムで演奏する。」と項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」は0点と変化がなかった。しかし、音楽の授業の開講時から評価点が4.7点と4.3点と高かったため、開講時から意識をしっかりとって注意して演奏し、終了時までその意識や注意が継続されていると考えられる。項目「1. 正しい音で演奏する。」と項目「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」の2項目は、音楽の授業の終了時には、5点満点の「良くできている」という評価点まで意識が高まった。上級者でも、バイエルの練習曲の中の難易度が高い曲を演奏するにつれて、より意識する項目のようである。項目「2. 正しいリズムで演奏する。」と項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」の2項目は、音楽の授業の開講時も終了時も意識に差はないが、もともと4点以上と高い評価点であるため、常に意識して演奏する項目であるといえる。

### 3. 5 初級者グループ、中級者グループ、上級者グループの比較検討

各グループの評価点の結果と特徴については、3. 4で明らかにした。3. 5では、初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループの評価点の結果を比較検討し、特徴を明らかにする。3. 5の図の縦軸は各グループの平均評価点で、横軸に質問の12項目が置いてある。図中の各項目の4本のグラフは、左から初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループのグループ平均の評価点のグラフである。これらの図の構造は、3. 5のすべての図に共通である。

#### 3. 5. 1 音楽の授業の開講時の評価点比較

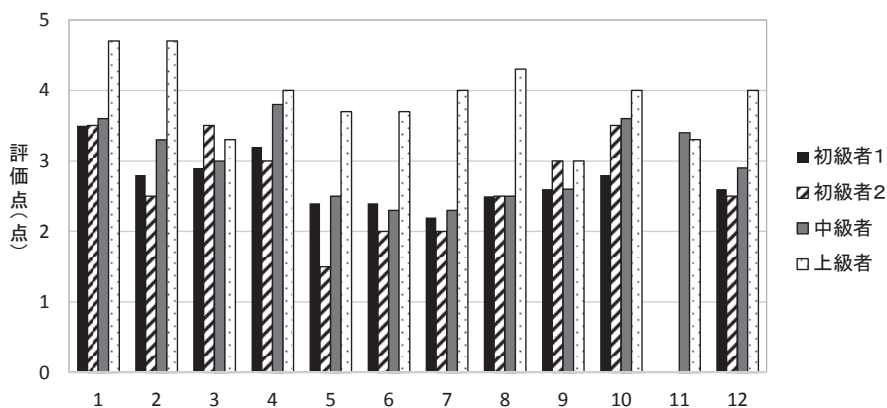


図5 音楽の授業の開講時の評価点

図5は、各グループの音楽の授業の開講時の評価点を比較した結果である。12項目中7項目で、上級者が他の3つのグループに比べて1点以上の高い評価点であった。また、上級者は、すべての項目で3点以上の評価点である。そのうち7項目は4点以上である。授業の開講時においては、上級者グループの意識の高さが際立っている。

### 3. 5. 2 音楽の授業の終了時の評価点の比較

図6は、各グループの音楽の授業の終了時の評価結果を比較した図である。項目「11. 臨時記号を正しく演奏する。」は、前述の通り、初級者1グループと初級者2グループを除いてある。

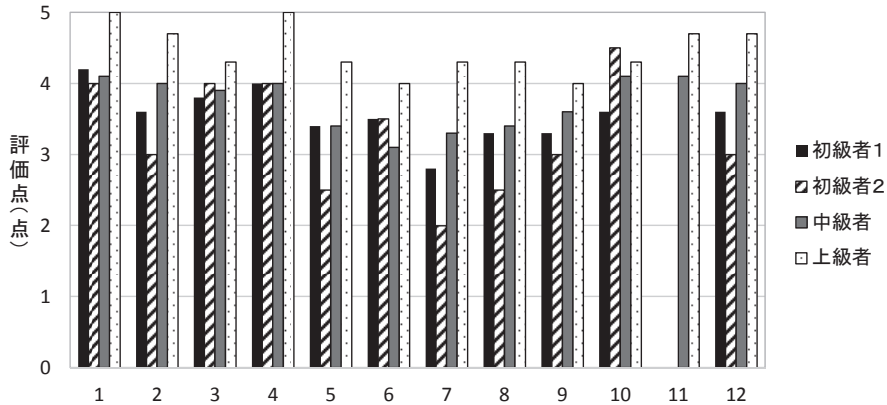


図6 音楽の授業の終了時の評価点

音楽の授業の終了時の評価点は、項目「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」以外のすべての項目において、上級者グループの評価点が他のグループに比べて高かった。また、上級者グループは、すべての項目において評価点が4点以上になっている。しかし、上級者グループと他のグループの評価点の差は、授業開講時に比べると少なくなっている。初級者1グループと初級者2グループでは、評価点の最高点と最低点の差が1点以上あった。

### 3. 5. 3 音楽の授業の開講時と終了時の評価点の差の比較

学生は、半期の授業と練習により、ピアノ演奏能力を向上させ、注意項目に対する意識が高まっているはずである。音楽の授業の終了時の評価点から開講時の評価点を引いた評価点の差（以降「評価点増加」と記す）を比較検討することで、この点を明らかにする。

図7は、各グループの評価点増加の結果である。

初級者1グループは、項目「11. 臨時記号を正しく演奏する。」を除いたすべての項目で、0.6点から1.1点の間で評価点が増加した。初級者2グループは、項目「7. 正しい強弱記号で演奏する。」と項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」、項目「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」では、評価点が増加しなかったが、その他の項目では、0.5点から1.5点の間で評価点が増加した。中級者グループは、すべての項目で評価点が増加し、評価点増加は0.2点から1.1点の間であった。上級者グループは、項目「2. 正しいリズムで演奏する。」と項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」では、音楽の授業の開講時と終了時の評価点の差はなかった。ほかの項目は、0.3点から1.4点の間で評価点が増加した。全体で増加分が多かったのは、初級者2グループの項目「6. 曲の途中の休符を正しく演奏する。」の1.5点と上級者



グループの項目「11. 臨時記号を正しく演奏する。」の1.4点であった。この増加分が多い2項目を除くと、評価点が増加した他の項目は0.2点から1.1点の幅の中での増加であった。

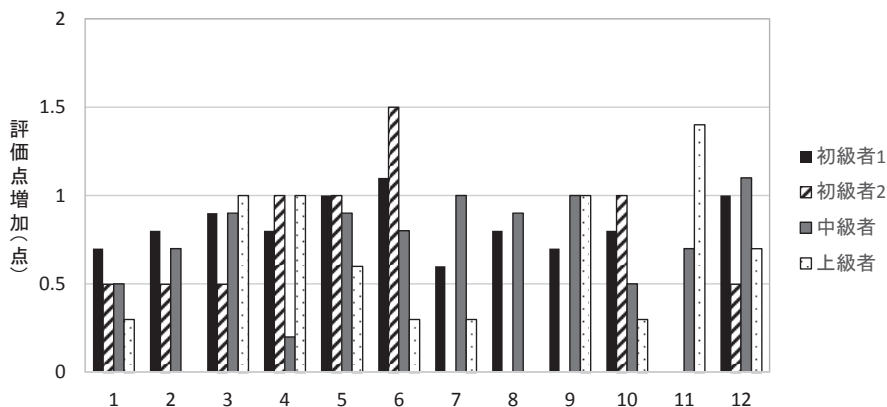


図7 音楽の授業における評価点増加

### 3. 6 評価点と評価点増加の2018年度と2017年度の比較

初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループの2018年度と2017年度の評価点と評価点増加にどのような特徴と差があるのか比較検討する。

#### 3. 6. 1 授業開講時の評価点

まず、音楽の授業の開講時の評価点を見てみる。図8は、各グループの音楽の授業の開講時の全項目の評価点を平均した評価点（以降「全項目平均評価点」と記す）の結果である。図の縦軸は全項目平均評価点で、横軸に4つのグループが置いてある。灰色のグラフは2017年度的全項目平均評価点で、黒色のグラフは2018年度的全項目平均評価点である。これらの図の構造は、3. 6. 2の図と共通である。

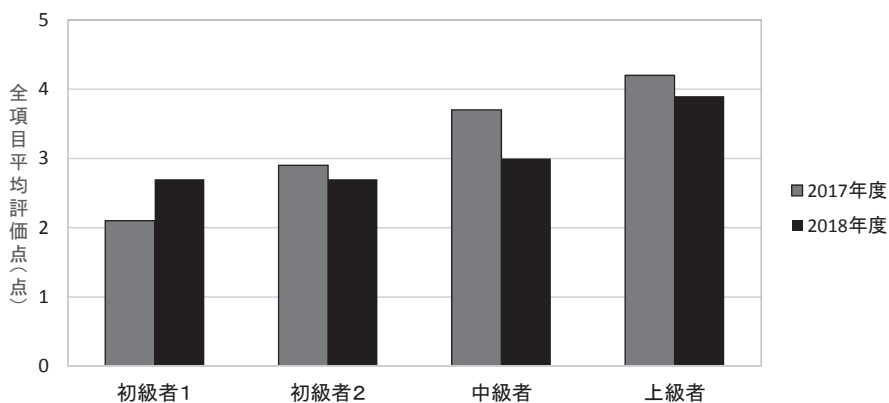


図8 授業開講時の全項目平均評価点

2017年度の音楽の授業の開講時の全項目平均評価点は、初級者1グループ<初級者2グループ<中級者グループ<上級者グループというように、上級者グループになるにつれて、全項目平均評価点が高くなり、きれいな右上がりのグラフになっている。

2018年度の音楽の授業の開講時の評価点は、初級者1グループと初級者2グループが同じ点数の評価点である。そして、中級者グループ、上級者グループと全項目平均評価点は増加していくが、増加分は2017年度に比べ少ない。

2017年度の初級者1グループと上級者グループの全項目平均評価点の差は約2点で、2018年度の初級者1グループと初級者2グループの全項目平均評価点と上級者グループの全項目平均評価点の差は約1点であった。2018年度の全項目平均評価点の差分は、2017年度に比べると、約半分と少なかった。

初級者1グループでは、2018年度の全項目平均評価点が2017年度より高いので、音楽の授業の開講時における注意項目への意識が高かった。

### 3. 6. 2 授業終了時の評価点

図9は、2018年度と2017年度の音楽の授業の終了時の全項目平均評価点の結果である。

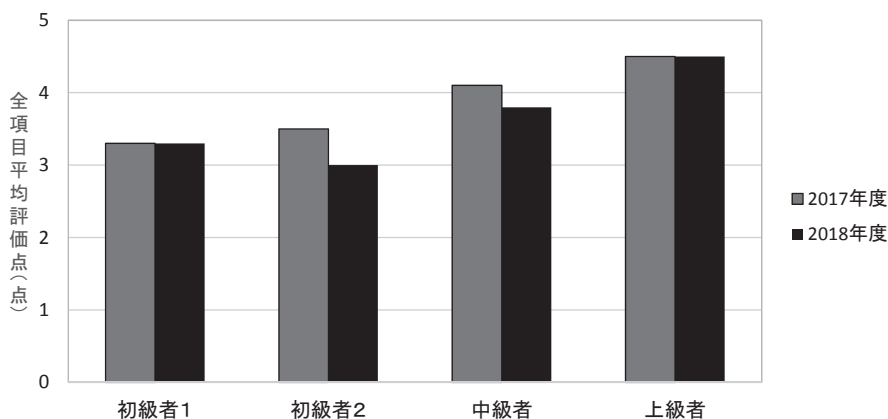


図9 授業終了時の全項目平均評価点

授業の終了時、最終的に到達した全項目平均評価点を2018年度と2017年度と比べてみると、初級者1グループと上級者グループでは、到達した全項目平均評価点は2018年度と2017年度で同じであった。初級者1グループも上級者グループも、2018年度と2017年度で同じ意識レベルに到達した。

初級者2グループと中級者グループは、2017年度より2018年度の方が、全項目平均評価点が少し低くなっている。

2017年度は、終了時の全項目平均評価点が初級者1グループ<初級者2グループ<中級者

グループ<上級者グループという右上がりに増加していた。2018年度は、初級者2グループ<初級者1グループ<中級者グループ<上級者グループと、初級者2グループの全項目平均評価点が一番低かった。

### 3. 6. 3 全項目平均評価点増加

図10は、2018年度と2017年度の全項目平均評価点増加の結果である。全項目平均評価点増加は、授業終了時の全項目平均評価点から開講時の全項目平均評価点を引いた全項目平均評価点の増加分である。図10の縦軸は全項目平均評価点増加で、横軸には4つのグループが置いてある。灰色のグラフは2017年度の全項目平均評価点増加で、黒色のグラフは2018年度の全項目平均評価点増加である。

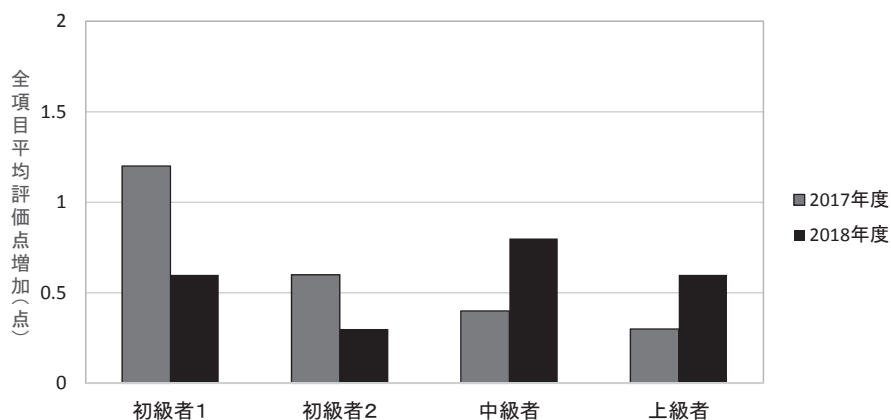


図10 全項目平均評価点増加

初級者1グループの2018年度の全項目平均評価点増加が、2017年度に比べて少ない。しかし、3. 6. 2ですでに述べたように、音楽の授業の終了時の全項目平均評価点が2018年度と2017年度と同じであったので、2018年度の開講時の全項目平均評価点が高かったことを意味している。そのため、全項目平均評価点増加が2017年度に比べて少なくなっている。

上級者グループでは、2018年度の全項目平均評価点増加が昨年度より多かった。上級者グループも音楽の授業の終了時の全項目平均評価点が2018年度と2017年度と同じであったので、2018年度の開講時の全項目平均評価点が低く、全項目平均評価点増加が多くなった。

初級者2グループの全項目平均評価点増加は、2018年度は2017年度より少なかった。音楽の授業の開講時と終了時の全項目平均評価点は、2017年度の方が2018年度に比べ高くなっている。

中級者グループでは、2018年度の全項目平均評価点増加は2017年度に比べて多かった。授業の開講時と終了時の全項目平均評価点は、ともに2017年度の方が高かった。2018年度の全

項目平均評価点増加が2017年度より多くても、終了時の全項目平均評価点は2017年度より低かった。

#### 4. 考察

音楽の授業の開講時における全項目平均評価点をみると、注意項目に対する意識は、初級者1グループ<初級者2グループ<中級者グループ<上級者グループと高くなり、ピアノ演奏経験が長くなると意識は高くなっている。年度により、全項目平均評価点とグループ間の差は異なっているが、このパターンは同じである。ピアノ演奏指導の観点からは、個人レッスンにおける個別の細やかな指導がなによりも大切である。これまでも、個人レッスンの際には、学生一人ひとりと十分に話しをし、その時に最も必要なピアノ指導を行ってきている。一人ひとりにあった細やかなピアノの指導が、意識の向上につながっていると思われる。また、授業終了時の全項目平均評価点は、すべてのグループで開講時より向上している。12の注意項目に対する意識を向上させる指導法は、レベルアップは必要ではあるが、有効であると考えている。

評価点増加を詳細にみると、2018年度は、授業の開講時と終了時で、評価点と同じ項目が4つあった。上級者グループの項目2,8と初級者2グループの項目7,8,9である。上級者グループの項目「2. 正しいリズムで演奏する。」と項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」の評価点は4.7点と4.3点で高く、開講時から終了時まで高い意識が継続している。初級者2グループの項目は、項目「7. 正しい強弱記号で演奏する。」、項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」と項目「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」である。これらの項目の評価点は2点から3点であった。注意項目の数が多い、他の注意項目をより意識する、授業の進行之にしたいが楽曲が難しくなるなどの理由はあるが、3点に満たない項目の意識レベルが向上しないのは課題である。個人レッスンの機会に一人ひとりの状態をこれまで以上に十分に把握し、細やかな指導をすることをさらに徹底したい。今回の調査と検討の中で、課題が明らかになったことは重要で、質問紙調査と検討が有効であり、その結果を授業に活用することで授業のレベルをさらに向上させることができると考えている。

評価点が増加した項目をみると、2018年度と2017年度で必ずしも同一ではない。年度により学生が変わるので、その年度の学生の特徴をとらえて、12の注意項目の中からその年度にあった重点項目を選び、指導することが必要である。そのためには、前期の音楽の授業のピアノ指導の最終日に行う質問紙調査に加えて、前期の授業の中間くらいの時期に調査をし、その結果を前期の後半の授業にいかすことが有効と考えられる。

評価点が増加した項目の中で、すべてのグループで、2018年度も2017年度も評価点が平均で4点以上と高い項目があった。項目「1. 正しい音で演奏する。」と項目「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」である。この項目は、注意項目の中で、最も重要で基本的な項目である。ピアノ演奏習得の初めの段階で身につけなければならない項目であることが、今回の調査でも裏付けられた。

項目「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」は、重点指導項目として、筆者が強調して指導している項目の1つである。初級者1グループと初級者2グループ、中級者グループの評価点増加は、0.9点から1点と多く、意識が大きく向上した。途中の音の長さ等は意識できても、曲の最後は、弾き終わった安心感から、音符や休符の長さが短くなってしまいう傾向があるが、曲の最後までしっかり意識できるようになったのは、指導の効果があらわれたと考えている。この項目の上級者グループの評価点増加は0.6点で、上級者でも増加は多かった。また、同じく重点指導項目である項目「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」は、初級者1グループと中級者グループで評価点増加が0.8点から0.9点と多く増加した。こちらも重点指導項目として指導した結果と考えている。さらに、2017年度から気になっている項目「3. 正しい指使いで演奏する。」は、全グループの評価点増加が0.5点から1点で、音楽の授業の開講時より終了時の方が意識するレベルが向上した。この点に関しても、ピアノ指導の効果があつたといえる。

## 5. まとめ

音楽の授業のピアノ指導で、筆者が特に心掛けて指導している、ピアノ演奏の際に意識しなければならない重要な12の項目について、音楽の授業の開講時と終了時の意識の程度を学生に評価してもらい、2017年度と比較しながら分析検討した。その結果、学習者のピアノ演奏に関する意識について、以下のことが明らかになった。

- (1) 音楽の授業の終了時には、開講時に比べ各グループの全項目平均の評価点が増加した。
- (2) 音楽の授業の終了時の全項目平均評価点は、2018年度では、初級者2グループ<初級者1グループ<中級者グループ<上級者グループで、2017年度では、初級者1グループ<初級者2グループ<中級者グループ<上級者グループであった。初級者2グループを除くと、上級者になるにつれて、意識の評価点が高くなり、より意識ができるようになっている。
- (3) 音楽の授業の終了時の全項目平均評価点は、3点から4.5点であった。多少の差があるものの、2018年度と2017年度の各グループの全項目平均評価点は、同一またはほぼ同じであった。2018年度と2017年度の終了時の注意項目に対する意識は同じレベルに到達していた。
- (4) 2017年度の全項目の評価点増加は、すべて正であった。2018年度は、初級者2グループと上級者グループにおいて評価点増加が0点の項目が4つあった。他の8つの項目は、評価点増加は正である。上級者グループでは、評価点増加が0点は2項目で、どちらも開講時にすでに4点以上と高い意識レベルであった。開講時から終了時まで高い意識が継続している。初級者2グループでは、評価点増加が0点は3項目で、評価点は2点から3点であった。他の注意項目をより意識したのであろう。
- (5) 項目「1. 正しい音で演奏する。」と項目「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」は、すべてのグループで高い評価点を得た項目である。音楽の授業の終了時には、平均評価点が4点以上であった。これは、2018年度も2017年度も同様の傾向である。

2018年度と2017年度では、評価点や評価点増加の傾向は異なっていた。しかし、音楽の授業の開講時の意識と終了時の意識の評価点は、上級者グループが他のグループに比べて高いという傾向には変わりはない。

担当する学生の特徴を理解し、ピアノの演奏指導をしていくことは大切なことである。そのためにも、質問紙調査は有益で、音楽の授業の1年生前期に実施することは大変意味のあることである。調査結果から得られた内容を、授業のピアノ指導に活用することで、学生が習得しやすいピアノ指導が可能となる。2018年度と2017年度は、前期の音楽の授業のピアノ指導の最終日に質問紙調査を行ったが、前期の授業の中間くらいの時期に実施すれば、前期の後半の授業に結果を活用することができるであろう。

ピアノ演奏の指導を行う際、12の注意項目を細やかに繰り返し指導することで、学生の12項目に対する意識が高まり、演奏が仕上がっていった。ピアノ演奏の指導内容と指導方法は妥当であると考えられる。さらに工夫をしてレベルアップを目指したい。

ピアノ指導は個人レッスンなので、学生と話しながら、一人ひとりに一番よいと思われる方法でこれまでピアノ指導を行っている。一人ひとりの状況が異なるため、細やかな個別指導が必要である。細やかなピアノ指導が、注意項目の意識の向上につながっていると思われる。この点は、今後も大切に実施していきたい。

## 6. 今後の課題

本研究では、ピアノ演奏において意識すべき項目に対する意識レベルが、ピアノ演奏指導によりどのように変化したかを、2018年度と2017年度を比較しながら検討した。そして、これらの結果から得ることのできた内容をいかした効率の良い学習方法を検討した。今後は、音楽の授業を受講した学生たちが、次の音楽の授業でどのように成長するのか、学生のピアノ演奏の成長過程を明らかにしたい。そして、効率の良いピアノ学習方法とより効果的な指導法について更に継続して検討していきたい。

## 7. 倫理的配慮

本研究は、愛知江南短期大学研究倫理規程に基づき質問紙調査を行った。その際、口頭での説明を行い、承諾を得た。

## 参考・引用文献

---

Barry, N.H., & Hallam, S. (2002) "Practice." *The Science & Psychology of Music Performance*, pp.151-165.

夏目佳子 (2018) 保育の表現技術（音楽）の指導法についての研究 —ピアノ演奏— 愛知江南短期大学紀要 第47号 pp.19-33.